

様式 6

平成19年度共同利用実施報告書(研究実績報告書)

1. 研究種目名 研究集会
2. 課題番号または共同利用コード 2007-W-04
3. 研究課題(集会)名 和文: これからの地磁気観測とCA研究
英文: Study of Conductivity Anomaly and the Geomagnetic Observation in the Future
4. 研究期間 平成19年12月17日 ~ 平成19年12月18日
5. 研究場所 東京大学地震研究所2号館第1会議室
6. 研究代表者所属・氏名 藤 浩明
(地震研究所担当教員名) 歌田 久司
7. 共同研究者・参加者名(別紙可)

共同研究者名	所属・職名	備考
別紙		

8. 研究実績報告(成果)(別紙にて約1,000字A4版(縦長)横書)(別紙に作成)
別紙

10. 成果公表の方法(投稿予定の論文タイトル、雑誌名、学会講演、談話会、広報等)
2007年度CA研究会論文集の発行。

備考 ・研究成果を論文等で発表される場合、以下の形式の文章を謝辞等に記載して下さい。

(英語)This study was supported by the Earthquake Research Institute cooperative research program.

(和文)本研究は、東京大学地震研究所共同研究プログラムの援助を受けました。

・特定共同研究Bについては、プロジェクト終了年度に冊子による報告書の提出が必要です。

・研究成果について、本所の談話会、セミナー、「広報」での発表を歓迎いたします。

別紙： 研究集会参加者名簿

氏 名	所属機関	職 名	備 考
歌田 久司	東京大学地震研究所	教授	
行武 毅	東京大学	名誉教授	
藤井 郁子	気象庁地磁気観測所	研究官	
根本 悟	国土地理院	技官	
湯元 清文	九州大学大学院理学研究院	教授	
後藤 忠徳	海洋研究開発機構 IFREE	研究員	
大和田 毅	気象庁地磁気観測所	技官	
熊川 浩一	海上保安庁海洋情報部	研究官	
上嶋 誠	東京大学地震研究所	准教授	
浅利 晴紀	G F Z , P o t s d a m	研究員	
大志万 直人	京都大学防災研究所	教授	
村上 英記	高知大学理学部	准教授	
三品 正明	東北大学理学部	准教授	
小川 康雄	東京工業大学火山流体研究センター	教授	
山口 覚	神戸大学理学部	准教授	
藤 浩明	富山大学	准教授	

他計 26 機関、80 余名。

別紙：平成 19 年度東京大学地震研究所研究集会成果報告

陸上における地磁気観測環境は、現在悪化する一方である。それは、単に人間活動の拡大による人工ノイズの増加というだけに留まらず、現行の地磁気観測体制を維持してゆく事さえ危ぶまれる状況にある。しかし、地磁気観測は、地震研究所にも八ヶ岳に地球電磁気観測所が設置されている事に象徴される様に、地震研究所においては地震予知研究推進センター・火山噴火予知研究推進センター・海半球観測研究センターなどで進められている「電気伝導度異常（CA）」に関する研究を支える重要な基礎データでもある。本研究集会では、この機会に改めて地磁気観測と CA 研究の接点を再確認し、日本における地磁気観測と CA 研究の将来展望について議論する事を目的として、平成 19 年 12 月 17・18 日の二日間に亘り東京大学地震研究所 2 号館第 1 会議室において開催した。

具体的には、陸上・海底・衛星各分野の地磁気観測専門家を招聘し、地磁気観測の過去・現在・未来について計六件のレビュー講演を行って頂いた。一方、CA 研究関係者からは、特に地磁気観測データに立脚した電気伝導度異常に関する研究発表計三十二件（内口頭発表二十四件、ポスター発表八件）を募り、両者の接点を確認した。これらの講演を基に、今後の地磁気観測及び CA 研究のあり方、特に多分野との連携の観点から「攻めの観測・攻めの研究」を行ってゆくには、どういう観測・研究の体制が望ましいかについて、各講演後の質疑応答やポスターセッション、また、二日目の昼休みに開催した CA 研究会打ち合わせ会で自由に討論する場を設けた。これらの議論には、基準場の精度を維持するのに必要な観測点配置とは何か、或いは、変動場の検出に要求される空間密度に見合った観測点配置とは何かについての議論を含んでいた。基準場としては、最近漸く長年の CA 関係者の努力の集大成とも言うべき「日本地磁気参照モデル（JGRF）」が完成に近づきつつあるので、JGRF そのものに関する議論、また、JGRF を用いた応用研究例についての研究発表も行われ、議論の対象となった。さらに本研究集会は、日本地球電磁気・地球惑星圏学会（SGEPSS）の分科会としての役割も兼ね備えていた為、上記の主テーマに拘らず、地磁気ないし CA に関する研究発表も広く歓迎し、全参加者八十余名の内、PD 七名・大学院生七名・学部生五名と若い世代の参加が四分の一弱にのぼった。この事は将に「これからの地磁気観測と CA 研究」の地平を切り拓いてゆく上で、大きな力となってゆくものと期待される。